

『四海茫茫』

⑩人たらし

近代、世界に名を馳せた日本人として最も有名なのは東郷平八郎であろう。「アドミラル・トーゴ」「東洋のネルソン」など、いくたの呼び名が今に伝えられている。本連載100回でも紹介したように米國タイム誌がカバーパーソンに選んだ最初の日本人も東郷であった。第2次大戦後、GHQは日本の軍事モニュメントをすべて撤去しようとしたが、米國海軍は東郷に関する施設、資料には手を触れさせなかったという。そればかりか太平洋で対日戦争の指揮を執った米國のチェスター・ニミッツ氏(最終階級：海軍元帥)は、日露海戦時の旗艦“三笠”の荒廃を憂い、その修復保存を図るため資金面でも援助した。東郷に対する尊敬の念がいかに強かったかを物語る話である。

東郷の指揮下で日露日本海海戦時の作戦担当参謀を務めた秋山真之も欧米で知名度が高い。海戦勝利後の連合艦隊解散式で訓示草稿を手がけたのは彼。これを読んで感激した米國セオドア・ルーズベルト大統領が全文を翻訳させ、米國海軍士官全員に配布したという話はあまりにも有名。

その秋山真之終焉の地をご存知だろうか。神奈川県・小田原市にある。小田原城の南に位置し、説明版に「対潮閣(山下亀三郎別邸)跡“秋山真之終焉の地”」とある。

秋山と山下は伊予国、今でいう愛媛県の出身。もっとも秋山は伊予松山藩の松山、山下は伊予吉田藩(伊達宇和島藩支藩)の喜佐方村が出身地であり、昔風にいうなら国が違った。それでも同じ伊予国から出た仲であり、気心が通じたのであろう。歳も近い。秋山は

1868年4月12日(慶応4年3月20日)、山下氏は1867年5月12日(慶応3年4月9日)生まれ。

本連載の今回は対潮閣の持ち主、山下亀三郎氏が主人公。山下汽船を興した人物であり、成功の大きさでいえば屈指の存在、おそらく最右翼に挙げて異論は出ないと思われる。記者にとっては「最も会いたかった海運人」の一人である。

秋山は虫垂炎(盲腸)を患い、養生していた小田原で病状を悪化させ、対潮閣の2階で亡くなった。享年49。生前、小田原では山県有朋の別邸を訪ね、話し込むことがあったと伝えられている。山下氏も山縣と交流があった。対潮閣の命名とその造園は山縣によるもの。山下氏は海運業に成功し、別邸を手にしたわけだが、そもそも「日露開戦近し」の情報を入手したことが大成功のスプリングボードとなった。関係資料に「開戦にまつわる情報は秋山から入手した」との記述がある。

いずれにしろ山下氏は秋山と親交を結んでいた。その秋山が山下氏を指して「彼に“三絶”あり」と評した。具体的には「その一、よく人の教えを聴くこと。すなわち情報通」「その二、よく人を使うこと。すなわち人間通」「その三、乾坤一擲の離れ業を行うこと。すなわち果敢な実行力」の3点を挙げたという。

山下氏の事跡をたどると、秋山の眼力の確かさがよく分かる。また、山下氏はもともと人を惹きつける人物であったと想像できる。既に語りつくされて記者など出る幕はないのだが、山下氏が重大な局面に立つと氏に手を差し伸べる人が必ず現れる。もちろん本人の力もあるのだが、それ以上に周りの人物の力に助けられ、あい路を打開していく場面が繰り返し見ら



山下亀三郎氏

れる。運だけではこうはいかない。特別な力の作用を呼び込む、大変な“人たらし”であったに違いない。

記者は数年前、愛媛県宇和島市を訪問したことがある。3方は山、前面は穏やかな宇和海で街の中心部に小高い山があり、その頂上に藤堂高虎が築いたという宇和島城の天守閣が残っている。行き交う人々の風情がいい。良き日本がしっかりと息づく街と実感した。山下氏の出生地は市街の中心からちょっと離れた宇和島市吉田町にあった。昔の地名は宇和郡喜佐方村。

山下氏が海運界に躍り出た第1船の船名“喜佐方丸”は出身地の村からとったもの。同船を購入し海運業を開始したのは1903年(明治36年)。日露開戦は1904年2月8日だから、まさに開戦直前の決断と行動であった。1911年(明治44年)には山下汽船合名会社を設立、さらに1917年(大正6年)山下汽船を株式会社に改組して海運業を拡大発展させ、1926年(大正15年)の時点で、日本最大の備船主となっている。

当時の山下汽船の業容は山縣記念財団発行の『海、船、そして海運』(編著：田村茂)の中で詳しく紹介されている。

(瓜生隆幸)